

① 次の□内にあてはまる語句として最も適切なものを後から選び、それぞれ記号で答えなさい。

① 朝三暮四 □ 解答番号は

② □鬼夜行 □ 解答番号は

③ 千変□化 □ 解答番号は

④ 一読□嘆 □ 解答番号は

⑤ □網打尽 □ 解答番号は

ア 一 イ 三 ウ 四 エ 百 オ 万

② 次の作品の作者を、後から選び、それぞれ記号で答えなさい。

① 枕草子 □ 解答番号は

② 舞姫 □ 解答番号は

③ サラダ記念日 □ 解答番号は

④ 伊豆の踊子 □ 解答番号は

⑤ 方丈記 □ 解答番号は

ア 森鷗外 イ 川端康成 ウ 嶋長明 エ 清少納言 オ 俵万智

3 次の文法に関する問いにそれぞれ答えなさい。

問 一次の動詞の活用の種類として最も適切なものを後から選び、それぞれ記号で答えなさい。

調べる

解答番号は

11

する

解答番号は

12

歩く

解答番号は

13

ア 五段活用

イ 上一段活用

ウ 下一段活用

エ サ行変格活用

問 二次の文の単語の数として最も適切なものを後から選び、それぞれ記号で答えなさい。

① 朝から塾へ行って勉強をした。

解答番号は

14

ア 7

イ 8

ウ 9

エ 10

② おいしいステーキを食べる。

解答番号は

15

ア 4

イ 5

ウ 6

エ 7

4 次のAとBの文章を読んで後の問いにそれぞれ答えなさい。なお、設問の都合上、表記を一部改めている。

A 河野多恵子「著者から読者へ」

よい小説とは、①おもしろい小説のこと。私はそう思っています。ただ、おもしろいという意味は説明しにくい。小説の褒め言葉の一つに、おもしろくて一気に読んでしまったという言い方がありますが、そういう小説は私には物足りないのです。おいしいお料理をフルコースで頂いている時、すでに頂いたお皿のおいしさに幸せな気持になりながら、これから出てくるお皿を楽しみにしながら、目下のお料理のおいしさに浸っているのではないのでしょうか。目下のお料理を一気に平げたい、あとのお皿を次々と早く出してもらいたい、とせかせかする気にはなれないと思います。先を読み急ぎたくなる小説は、本当においしい、おもしろい小説ではないと思います。目下の一口々々のおいしさを楽しめるのが、おもしろい小説であり、よい小説なのではありませんか。

そうして、おいしいお料理を頂き終えた時、全身が満足感を覚えるように、おもしろい小説であるよい小説も、やはり読み終えた時、深い満足感を全身に与えます。どういう満足感なのか。それを読むまえよりも、人間と、自然を含めたこの世に対して、遽に新鮮さ、いとしさ、すばらしさを感じ募っている、自分を見出す満足感です。

私はそういう小説が、おもしろい小説であり、よい小説であると思っています。谷崎潤一郎（注1）の諸作やC・ブロンテ（注2）の『ジェーン・エア』（注3）やE・ブロンテ（注4）の『嵐が丘』（注5）というような小説は、そういう意味でのおもしろい、よい小説です。文豪ばかりでなく、新人作家の小説のなかにも、そういう意味でのおもしろい、よい小説が現われることがあります。②その種の作品も、私は愛読します。しかし、文豪の作品であろうと、高名な評論家が仔細（しさい）に論じて、如何にお褒めになっている作品であろう

と、すでに述べました意味でのおもしろさに乏しく、読み終えても、それを読むまえの自分と一向に変わりばえがせず、一つ小説を読んだだけ、何だか疲れた、というような気分させられるのでは、つまらない小説としか思えません。

以上は、もちろん読者としての私の小説に対する考えです。作者としての私は、おもしろい小説、よい小説を書こうと予め目指すわけではないのです。よい文章で書こうと思っただけでもないのです。

文章はお化粧ではないので、文章自体をよくしようとしても、よい文章が生まれるはずはない。文章は自然の色艶いろつやのようなもので、心身が健康ならば、色艶は当然よくなります。小説を書く時、私が何よりも、と申しますよりも、唯一重要なことは、何を書きたいかということです。書きたいことのポイント、つまり核になるものです。その小説を書きたい（a）創作シヨウドウと言ってもいいし、動機と言ってもいい。それが鮮烈なものであれば、書いていると③張り合いがあるし、書き終えた時の満足感も一入ひとしおです。創作を仕事にきてきて、④つくづくよかったですと思います。

ところで、書きたいことの核だの、創作シヨウドウだの、動機だの、それが鮮烈なものであればだのと申しますと、何か物々しく聞えそ
うですけれども、それは書き手にとっては切実なものであっても、第三者にとっては別に大したものではない。作品の核との結びつきは作者の内的手続きにすぎず、その結果あらわれたものが読者のまえに差しだされるわけですから。

ついでに申しますと、かねがね不思議に思うのですが、私の小説は難解と言われることがしばしばあるのです。私は自分の小説は少しも難解ではなくて、極めて分りやすいと思っ
ているのです……。

私の創作の際の核になるものとは、たとえばどういうものなのか（前述のように、⑤それは決して物々しいものではない）、そして私の小説は分りやすいものであるはずだということ兼ね、この短編集のなかから『最後の時』を一例に挙げて述べておきたいと思
います。

ある時、知人から自殺者の話を聞きました。当人は大成者おこなもの初老の大金持おこなもの男性だったそうです。彼は超高級マンシヨンの一室を借り

ました。上等の家具も入れました。あとで分ると、自殺のための準備だったらしいのですが、そのようにして落ちついてから、ほんの二、三日後に飛び降り自殺をしたのだそうです。

その話に、私は深い印象を受けました。彼はその二、三日、どのような過ごし方をしたのだろうか。ホテル並みのマンションなので、バスの栓（注7）をひねりさえすれば、二十四時間いつでも温いお湯が出ます。今日明日には自殺するつもりでも、お湯に浸った時には、気がいいとやはり思ったのではないだろうか。食堂もあるマンションでした。食事をしていて、袖口にソースでもついたならば、おしぼりで拭くことはやはりしたのではないだろうか。二、三の相手に、さりげなく電話をしたのではないだろうか。——私には彼の様々の仕種（しぐさ）まで浮かんでくるようでした。

⑥私が彼の話を再び思いだしたのは、それから一年くらい経った時分だったでしょうか。私は突然に、開腹手術の必要があるかもしれないとなったのです。歯を抜くのは、わけがちがいます。死ぬかもしれない。責任ある立場にあるのではないけれど、身辺で片づけておきたいあれこれが胸に溢（あふ）れてきました。幸い、そのときは手術をしなくてすみました。が、その経験と彼の話が心の中で結びついて、⑦『最後の時』の核となりました。

私は健康を取り戻しておりまして、今もし一兩日後に死なねばならないならば、どういう行動をするだろうかと考えました。想像しているうちに、自分の生活のそれまで気づかなかった部分の発見もありました。私はいわゆる私小説というものを全く書いておりません。核に基づいて書くのですが、核はまた自分をそのまま書いたのでは、書きたいことが本当には表わせないことを感じさせてくれるのです。ですから、⑧『最後の時』の則子（のりこ）は私の分身ではありませんが、フィクションです。変装ではなくて、根からのフィクションです。

ところで、この書きだしには、⑨実に苦勞しました。主人公を一兩日中に死ぬかもしれない病人にするわけにはゆかないのです。重病人であれば、行動力も思考力も無きに等しいのですから。死刑囚（しけいしゅう）にも出来ないでしょう。まず、自由な行動が許されませんから。自殺予定者

にもできません。もともと、この小説の核には、私の死にたくなさ、生きたさが作用しているのですから。困りました。⑩そういう設定以外で、死なねばならない状況を設定するには、どういう方法があるのか。

毎日々々考えあぐねて、遂に閃いた時には、もう締切日を過ぎておりました。一兩日に死なねばならぬ運命が、彼女に与えられる。この小説で私が書くこととしていることの場合、その理由は書く必要は、少しもない。主人公を主語として、受身体で書きだすことにしました。受身体であれば、その運命を彼女に課し、告げるものが、誰であるか、書く必要もなくなります。それを書かないことが、この小説には却って適していることも分りました。彼女にその運命を課し、告げる相手を、神のような、(b)アクマのような、何かの霊のような、何かそういう存在にすることができずから。『最後の時』の冒頭なども、読者によつては、何だか難解にお感じになるかもしれませぬ。けれども、少しも難解ではないことがお分りくださつたかと思ひます。

私の小説は、どれもみな至つて分りやすいのです。小説というものについての(c)既成ガイネンを捨てて、自由に、素直にお読みくだされば、私が決して嘘を申していないことが、お分りいただけると思ひます。

B 河野多恵子『最後の時』(冒頭部分のみ抜粋)

死ぬことは兎も角としても、そういう形で死ぬのが運命だとしても、突然、ただちにと言われると、則子はどうしても承服できなかつた。

「猶予をください」

と彼女は願ひ、そして訊かれた。

「覚悟がつくまで待つてほしいというのですか？」

「誰にも死ぬ覚悟なんてつく筈はないでしょう」

と彼女は答えた。「殊にわたしは、年とった不治の病人なんぞじゃありません。まだ中年で、体は丈夫で、少くとも自分では頭も心も確かです。それに、わたしの躰には、昔の武士とやらの血は一滴だって流れていませんもの。余程手際よく死なせてくださらないと、⑩格別に往生際はわるいでしようよ」

「靈魂を信じていると言っていましたか……？」

「信じていますよ。けれども、だからといって、あつさり死ぬることにはなりませんわね」

「それでも、信じていないよりは、ましでしょう？」

「信じられないほうが、却っていいんじゃないかしら。靈魂なんて、本当に無力なものだろうと思いますよ。この世の人間の精神を感じたり、それに作用することはできません。肉体や、それから物質は見ることもできないし、関わることもできないものだ、私は想っているんです。それに、精神に対してだって、先方さまの感度が鈍かったり、(d)カビンすぎたりして、蒼いサインを捕え損ねられるとか、意味を深く取りすぎて誤解されるとかというようなことが始終でしょう。焦立たしくて、作用を発する気持も失せてしまう。こちらで感じる人間の精神だって、ありがたくないものばかりが増えてくる。⑪靈魂なんて所詮、焦立たしさと口惜しさの塊りみたいなものでしょう。永久にそんな苦しみの塊りにさせられるかと想うと、わたしは死ぬのが一層怖いのです。死ぬば一切が消え失せると考えることのできる人たちを羨みます。——」

そこで、彼女は叫んだ。「ああ、本当にいつまでも靈魂と肉体とが結合してほしいこと！　せめて、死んでも結合だけは——」

その思いは余りに激しく、彼女は猶予を願うことさえ一時忘れたくらいであった。

「とにかく……」

彼女は漸く再び口を開いた。「わたしは死にたくないんです。それなのに、死なされるのです。猶予くらいくだすってもいいでしょう」
「遁れることはできないのですよ」

「判っています。だからこそ、お願いするのです。せめて、二、三日は——」

「とんでもないことです」

「**甲**、わたしは突然生まれてきたんじゃないんです。死ぬときだって、そう急にはゆきませんよ。死ぬなら死ぬで、いろいろと……」

「いろいろって、何ですか？」

「ごらん下さい」

言いざま、彼女は両腕を縮めるようにして袖口を引っ張ってみせた。「これで死ぬますか。わたしは友人のお弔い（注8）に行くところだったので。死ななければならないのだと判っていたら、こんなもの着て出てきやしません」

「それで充分です。サンダル穿きでエプロンかけていたりなんぞするよりは、余っ程いいと思いませんか？」

「厭ですよ。死装束（注9）みたいで……」

「死装束は白——いや、白だけじゃあなかったかもしれない。確かに黒も死装束だ。殊に、自分で死装束みたいだと思ふのなら、猶いい。それで死んだら、きつと他人だつて身嗜がいいと思ってくれる。落ちついて死んだと思ってくれるでしょう」

「**乙**、真っ平なんです。わたしは覚悟ができて、落ちついて死んだなんて思われたくないんです」

「それなら、往生際のわるい人間に適わしい身なりとして、あなたは何を扱ひますか？」

「今すぐ判るものですか——そうでしょう、それを考え、着替えるのにだって時間が要るんです。お願いします」

「一日だけ待ってあげます」

「二日間にしてください」

「そうしたところで同じことです。一日以上は延ばせない」

彼女は、喪服の袖口の時計を見た。一時十七分であった。⑬ 小さな腕時計の秒を刻む音が、急に彼女には鋭く聞えはじめた。

「明日の一時十七分にここでまた会うことにします」

言われるなり、彼女はまたカチツ、カチツと鳴る音を聞いて竦んだ。明日の一時十七分ならば、自分はまだ生きているかもしれないが、一時三十分や四十分には、もう死んでいるかもしれない。そして、今日のその時刻は、束の間に訪れる。過ぎた（e）トタンに、自分は午後の一時三十分とか一時四十分という時刻には、もう永遠にめぐり合うことが出来ないのだ。

「二十六時間にしてください」

と彼女は願った。その間にも小さな針は鋭く秒を刻みつつ紛れもなく移行した。既に、十九分を指している。

「明日の午後三時十九分！」

と受け容れられるなり、彼女は一礼して歩を踏みだした。

⑭ ほう、葬式には行かないのですか、友人の霊魂が悲しんでもいいのですか？」

そう背後から言われたが、彼女は振り返りもせず、家へ向かって一層足を速めた。

（注1） 谷崎潤一郎：日本の小説家。

(注2) C・ブロンテ：英国の小説家。

(注3) 『ジェーン・エア』：C・ブロンテの小説。孤児として成長したジェーン・エアが、家庭教師として雇われた先の主人と結ばれるまでを描く。

(注4) E・ブロンテ：英国の小説家でC・ブロンテの妹。

(注5) 『嵐が丘』：E・ブロンテの小説。嵐が丘という屋敷で養育された捨て子のヒースクリフを主人公とした、恋と復讐の物語。

(注6) 仔細：事細かであること。またそのさま。

(注7) 栓：管の先などに取り付けた開閉装置。

(注8) お弔い：ここでは葬式のこと。

(注9) 死装束：死者に着せる衣服。

問1 傍線部①「おもしろい小説」とありますが、筆者のいう「おもしろい小説」として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

解答番号は

16。

ア 人間や自然など、この世に対し、新鮮さやいとしき、すばらしさを感じ募っている自分自身を見出す満足感を得ることができる小説のこと。

イ 人間である「私」のように、この世の自然の中に存在する生き物だけが、新鮮ですばらしいものであると満足感を得ることができる小説のこと。

ウ 人間である自分がこの世に存在していることの新鮮さや、いとしき、すばらしさを全身で感じる満足感を得ることができる小説のこと。

と。

エ 人間や自然といったこの世の新鮮さを感じ取っている自分自身が、次から次へと先へ進みたくなくなるような満足感を得ることができる小説のこと。

問2 傍線部②「その種の作品」にあてはまるものを次から選び、記号で答えなさい。 解答番号は

17

ア 文豪の作品。

イ 新人作家の小説。

ウ 谷崎潤一郎の諸作。

エ 筆者自身の小説。

問3 傍線部③「張り合いがある」とありますが、この意味として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

解答番号は

18

ア 努力しなくても問題ないと理解すること。

イ 努力すれば成果を得られると確信すること。

ウ 努力しなければ達成できないと悔やむこと。

エ 努力するかいがあると感じられること。

問4 傍線部④「つくづく」と同じ意味・使い方で用いられているものを次から選び、記号で答えなさい。解答番号は 19。

ア 最近はつくづく涼しくなった。

イ 噂うわさがつくづく広まった。

ウ 世の中がつくづく嫌になる。

エ 間違いがつくづく発覚する。

問5 傍線部⑤「それは決して物々しいものではない」とありますが、その理由として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

解答番号は 20。

ア 創作の核となるものは、読者にとって鮮烈なものであるけれども、書き手にとっては極めて分りやすいものであるから。

イ 創作の核となるものは、何を書きたいかということより、むしろ文章の色艶をよくするためのものであるから。

ウ 創作の核となるものは、書き手にとっては重要な内的手続きであるけれども、読み手にとっては関係のないものだから。

エ 創作の核となるものは、読み終えた時に深い満足感を与えるよい作品の中にだけ存在するものであるから。

問6 傍線部⑥「私が彼の話を再び思いだしたのは、それから一年くらい経った時分だった」とありますが、その理由として最も適切なもの

を次から選び、記号で答えなさい。解答番号は 21。

ア 自分自身に開腹手術をする可能性が浮上したことで死というものを意識し、以前に聞いた大金持の男性の自殺とその準備の話を自分に置き換えて考えたから。

イ 自分自身が開腹手術をした際、死ぬかもしれないという恐怖を感じ、大金持の男性が自ら準備して自殺をしたことを自分に置き換えて考えたから。

ウ 死んでしまった大金持の男性が実は以前から自殺を計画していたことを知り、死のために超高級マンションを購入していたことを自分に置き換えて考えたから。

エ 開腹手術をした自分自身が健康を取り戻し、このことから自殺した大金持は死とどう向き合ったのかと自分に置き換えて考えたから。

問7 傍線部⑦「『最後の時』の核」とはどのようなものか。二つの文章から読み取れるものとして最も適切なものを次から選び、記号で

答えなさい。解答番号は 22。

ア 霊魂は存在しているという信仰心とそれへの懷疑。

イ 死が目の前に迫った人間のとる行動と心理。

ウ 綺麗な死きれいなに方をしたいという人間の見栄とその無意味さ。

エ 死の前に目標を達成したいという欲望と満足感。

問8 傍線部⑧「『最後の時』の則子は私の分身ではありませんが、フィクションです。」とはどういうことか。最も適切なものを次から選

び、記号で答えなさい。解答番号は 23。

ア 則子は初老の大金持の男の死にたくなさや生きたさが作用している存在だが、それは「私」自身をありのまま表現したものであるという事。

イ 則子は「私」の体験や見聞きしたことや感じたことをヒントに作られたものだが、「私」自身をそのまま表現したものではないということ。

ウ 則子は「私」と同じように考えたり感じたりしなければならぬ存在であるが、実際「私」とは違う考えや感じ方を持った人物としていること。

エ 則子は「私」と同じように死ぬことが決まった人物であるが、死を受け入れないという点で架空の人物となっていること。

問9 傍線部⑨「実に苦勞しました。」とありますが、その理由として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

解答番号は

24

ア 受身体で書くことが難しかったから。

イ 最初の文がなかなか思いつかなかったから。

ウ フイクションを書いた経験がなかったから。

エ 無理の生じない設定がなかなか浮かばなかったから。

問10 傍線部⑩「そういう設定」にあてはまらないものを次から選び、記号で答えなさい。解答番号は

25

ア 「私」の死にたくなさが影響した主人公だという設定

イ 今にも死にそうな病人が主人公だという設定

ウ 自由な行動が許されない人間が主人公だという設定

エ 自殺予定者が主人公だという設定

問 1 1 傍線部⑩「格別に往生際は悪いでしょうよ」と則子という理由として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

解答番号は

26

ア 則子は友人の弔いに参加していた人々から、死を覚悟していたと思われなくなかったから。

イ 則子は死ねば一切が消えうせると考えているため、どうしても死にたくないと思っっているから。

ウ 則子の頭や心は確かだが、いつ不治の病人になるかはわからないので、そのときに死のうと考えていたから。

エ 則子は死ぬつもりもないうえ健康であつて、死ぬことを受け入れることができないから。

問 1 2 傍線部⑪「靈魂なんて所詮、焦立たしさと口惜しさの塊りみたいなもの」とはどういうことか。最も適切なものを次から選び、記

号で答えなさい。解答番号は

27

ア 靈魂は死ねば一切消え失せるものだけということ。

イ 靈魂は未練を残した人の末路だということ。

ウ 靈魂は無力な存在だと考えているということ。

エ 靈魂は真意を伝えることのできない存在だということ。

問 1 3 傍線部⑫「小さな腕時計の秒を刻む音が、急に彼女には鋭く聞えはじめた。」とありますが、その理由として最も適切なものを次

から選び、記号で答えなさい。解答番号は

28

- ア 死の宣告を受けた場所があまりに静かで、小さな腕時計の音もよく聞こえたため。
- イ 死ぬまであと一日になるか二日になるか、交渉次第だと考えたため。
- ウ 迫りくる死を意識することによって、時間を惜しむ気持ちが強くなってきたため。
- エ 生きていられる時間が決まると、すべての物事がいとおしく感じられたため。

問14 傍線部⑭「ほう、葬式には行かないのですか、友人の霊魂が悲しんでもいいのですか？」とありますが、この言葉にこめられている心情として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。 解答番号は 。

- ア 皮肉
- イ あわれみ
- ウ いつくしみ
- エ 同情

問15 空欄 、 にあてはまる語句の組み合わせとして最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

解答番号は 。

- | | | | | |
|---|--|------|--|------|
| ア | <input style="width: 30px; border: 1px solid black;" type="text" value="甲"/> | つまり | <input style="width: 30px; border: 1px solid black;" type="text" value="乙"/> | あるいは |
| イ | <input style="width: 30px; border: 1px solid black;" type="text" value="甲"/> | けれど | <input style="width: 30px; border: 1px solid black;" type="text" value="乙"/> | だから |
| ウ | <input style="width: 30px; border: 1px solid black;" type="text" value="甲"/> | たとえば | <input style="width: 30px; border: 1px solid black;" type="text" value="乙"/> | ゆえに |

エ

甲

なぜなら

乙

しかし

問16 傍線部（a）～（e）に相当する漢字を含むものを次の各群のA～Eのうちから、それぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。
（例を参考にすること）

例 カンゼンな形で残す。

A シンゼンで結婚式を挙げる。

I ゼンイの寄付。

U グウゼン休みの日に会った。

E アンゼンな場所。

答え エ

(a) 創作シヨウドウ

A シヨウメイをつける。

I シヨウキン女王に輝く。

U ホシヨウ制度を利用する。

E シヨウゲキを受ける。

解答番号は

31

(b) アクマ

解答番号は

32

ア 床のマに花を生ける。

イ 通行のジャマになる。

ウ マサツで熱を持つ。

エ 快刀ランマを断つ。

(c) 既成ガイネン

解答番号は

33

ア 本のガイヨウを説明する。

イ 繁華ガイに遊びに行く。

ウ ガイチュウを駆除する。

エ ガイトウするものに丸をつける。

(d) カビン

解答番号は

34

ア 彼女の人気にビンジョウする。

イ 彼は器用ビンボウだ。

ウ シュンビンに動く。

エ 空きビンを分別して捨てる。

(e) トタン

ア 生命の真理をタンキユウする。

イ タンテキに話す。

ウ 色のノウタンを表現する。

エ 彼のコンタンに気付いていた。

解答番号は

35。